

# 中央評論

206  
[45巻4号]  
中央大学

■特集■ 心の時代



中央評論

特集 心の時代

中央評論

第二〇六号 定価三〇〇円

二〇六号(一九九三年二月号)

一九九三年二月二〇日印刷  
一九九三年二月二十五日発行

**有斐閣** 出版案内  
(定価は税込み)  
東京・神田・神保町2 Tel: 03-3265-8811

## 刑法総論

●A5判上製カバード  
定価三九一四円

齋藤信治 著

●現代刑法学の主流の立場から叙述された新テキスト。本書によって①刑法がよく理解できる。したがって②刑法が面白い。特に著者による「設例」は、堅苦しく退屈な法律のイメージを一変させた。

③今日の学説・判例・立法の状況を一望のもとに見わたせるので、④視野が広がり、学問への情熱が湧き、法的思考力が獲得できる。

## 裁判キーワード

(有斐閣双書Kシリーズ)  
定価一七〇〇円

小島武司 編

●裁判および裁判に代わる仲裁・調停などにかかわる基本用語例について簡潔に説明し、法を動かすプロセスとその装置を全体として理解できるように編集したサブテキスト。討論問題・文献一覧付き。

## 保険入門

(有斐閣新書)  
定価九七九円

木村栄一・近見正彦・安井信夫・黒田泰行 著

●社会生活の多様化とともに重要度の増した保険の全般を一冊で概観できるコンパクトな入門書。保険の歴史・機能から説きおこし、損害保険・生命保険・社会保険の具体的内容を丁寧に解説する。

## 現代社会論

(有斐閣のシリーズ)  
定価一五四五円

古城利明・矢澤修次郎 編

●家族という小世界から地球規模の大世界まで、激しく揺れ動く現代社会の諸相を解き明かすことよって、現代社会学の理論に接近することができるように工夫した好評の入門書。付・ブックガイド。

●有斐閣の六法(平成6年版) 一九九四年版

## 小六法

●判例ニシテルクロス集  
箱入九〇頁  
定価三〇〇〇円

編集代表 堀野 宏・前田 庸・平井宜雄・青山善充

●収録法令 二三三件(憲法九条、民法一七九条、労働基準法二九条、労働組合法二九条、労働争議処理法二九条、労働契約法二九条、労働時間法二九条、労働安全衛生法二九条、労働者派遣法二九条、労働者派遣事業等臨時付随業務の執行に関する法律二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の就業等に関する法制整備法二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保に関する法律二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保に関する法律二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保に関する法律二九条)

●平成6年版の特色 二商法・商法特別法、労働基準法をはじめ不動産登記法・特許法・実用新案法、道路交通法等の大改正・重要改正を織り込み、新不正競争防止法など二件を新たに収録する。

●補遺 二通常国会・臨時国会に提出された行政手続法・同法関連整備法案、及び平成六年一月以降も有効な改正前規定を収録。

●巻末付録 二全国裁判所管轄区域表ほか ●新法令を追録・贈呈。

小台B判箱入二〇〇頁  
定価二二〇〇円

## ポケット六法

●判例ニシテルクロス集  
箱入九〇頁  
定価三〇〇〇円

●収録法令 一一八件(憲法九条、民法一七九条、労働基準法二九条、労働組合法二九条、労働争議処理法二九条、労働契約法二九条、労働時間法二九条、労働安全衛生法二九条、労働者派遣法二九条、労働者派遣事業等臨時付随業務の執行に関する法律二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保及び派遣労働者の就業等に関する法制整備法二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保に関する法律二九条、労働者派遣事業の適正な運営の確保に関する法律二九条)

●補遺 二行政手続法ほか ●別冊付録 二難読法令文字の読み方

## 有斐閣判例六法

●判例ニシテルクロス集  
箱入九〇頁  
定価二、〇〇〇円

●収録法令 七三件(参考法令一九件) ●判例付添立法令

●収録判例件数 二約九三〇〇件 ●参照条文付き法令

●ハンデサイズに最大の収録項目数、信頼度抜群の  
**有斐閣法律用語辞**  
内閣法制局法令用語研究会編 四八判上製 定価六一、〇〇〇円  
編集協力 大 大 総収録項目 二一三、四〇〇  
1月8日 広く使われる一般的な用語から実務上必要な  
発注! 的な用語までを、正確かつ平明に解説した最新

中央大学 図書館



50002058852

●目録送呈

りきれぬ人間の憎悪というものの不思議な深淵」とも書かれていた問題を強調したい。

T 社会的な暗さのみか、個人的な暗さが紙面・行間に濛々と立ち昇っているんだな、田宮の小説には。

Y 時代によって前者は薄れるにしても、後者は依然各自の胸裡にとぐるを巻く。人間の生が好悪・愛憎のしがらみを免れたいものなるからには、親子の間においてもそれはそうなので、田宮の小説はこの点だけからも幾久しく読み継がれるに相違ない。

T 尤も田宮の為人にも問題が在ったんじゃないの。

Y 『暗い坂』の主人公は、一寸好意を示されたのをよすがに、妻や義妹が女給の、井関という画家の家庭を毎日曜日、格別の用事も無いのに訪問、何時間も滞留、結局堪忍袋の尾が切れた井関に怒鳴られ、「真実の自分の父にさえ可愛がられなかった自分が、他人に愛されようと願ったこととすが、身の程知らぬ無恥なことであつたのだ」との嘆慨に沈む。

T 主人公の振舞は愛情に飢えていたとはいえ、無神経の極みだね。実際、あまりにもうじうじ、べたべたしてる奴はかなわないからなあ。踏み潰してやりたい衝動に駆られもするよ。田宮の父親の方にしたって憎む理由は有つたのさ。

Y 因みに、この種の事情に滅法つばらかな中川敏さんの話では、井関は丸山薫がモデルなんだそう。

T 中川氏の他、研究会では誰がどんな意見を開陳したんだ

い。もう時間が無いか。

Y 例の、私小説とフィクションとの関係。田宮の母親の死期は各小説によって、彼が七歳の時、大学生の時と相異なる。さらに平野謙の『誰かが言わねばならぬ』でその偽善性(?)をこてんぱんに批判された『愛のかたみ』によれば、千代夫人が亡くなった昭和三十一年、田宮数えの四十六歳の時母親はまだ存命なのだ。或いはこれら半自伝的小説以外の歴史小説、社会の矛盾や女性の運命を扱った現代小説にも通底する挫折・被虐についての異常な関心。一方は被虐・他方は加虐と色分けするのではなく、被害者も加害者として転置・把握するいわゆる相対化の視座の必要性。或いは田宮が『人民文庫』の武麟の子分で秋声や丹羽の影響も蒙り、庶民的リアリズムの修練を閲したところからの手だりの筆力。山本周五郎の山周節にも似た、読者の涙腺を刺戟するに効果的な常套句、平野謙の謂うさわりの功罪。侃諤の議論が交されたよ。

T その辺を精しく紹介してもらいたかったが。

Y でも僕は先ずもって、現に憂愁の青春を送りつつある学生達に田宮の小説を手を取ってもらいたかったのだ。

T 君自身のことを喋り過ぎたのでは。

Y こういう所見と性情の男が薦める本ならば、と唆かす果を結んだかもしれない。

T どこ迄も自惚れの強いやつだ。

Y ひがみ根性も人一倍持っているつもりだがね。

【海外通信】

パリ・東京 ディズニーランド  
の比較研究

中川 洋一郎

(経済学部助教授)



ある。

まいったなあ。暑い中、直射日光を浴びつつ一時間近くかけて並んでループ美術館にもはいる、体格の良いアメリカ人やドイツ人の脇からのぞき込むようにしてモナリザも見たではないか(瞬間的だったけど)。オルセー美術館で印象派の絵画もいっぱい見たではないか(印象派の絵自体がちょっと俗っぽく映るのは仕方がないね)。エッフェル塔に登るには当然エレベータを使ったが、凱旋門にも階段をえつちらおつちら歩いて登り、シャンゼリゼも上から見たではないか(やっぱ、上からみるとフランスには髪の毛の薄い人が多かったね。脂っこい食べ物とすぐに怒り狂って感情的に爆発するせいだな、きつと。パパも気をつけよう)。出来たての(でもないか)デファンスのアルシュにも宇宙カプセルみたいな透け透けのエレベータで登り、コンコルド広場からシャンゼリゼ通り、コンコルドデファンスまでズバツとまさに一直線になつていて、なんと、凱旋門の真ん中の空間に、遠くのコンコルド広場のオペリスクがきちんと納まつているのに感嘆したではないか(降りてすぐにその足で、コンコルド広場まで行って、そこから逆方向に眺め

たら、案の定、デファンスのアルシュが遙か彼方できちんと凱旋門の真ん中の空間に納まつていて、見事というか、なんとなくおかしかつたね。こんな建造物の奇抜な配置を考案するのはフランス人しかない。さすが、彼らはデカルトの子孫だ)。パリ以外にも、フランスご自慢のTGVに乗り、ブリュッセル、ジュネーブ、ピレネーの聖地ルールド：いろんなところに行つた。それなのに、フランスでの最高の思い出が、東京にもあるディズニーランドとは、：

ユーロディズニーランド(以下、EDLと略)があまりうまくいってはいないというところは、新聞とかラジオであらかじめ知つていた。従つて、家族との約束がある以上、仕方がないので、いやいやながらEDLに遊びに行つたとき、「たぶん、閑散としていたのではないか」と漠然と予想していた。ところがどうだ。あに図らんや、EDLには、人がいっぱいいた。明らかに、多すぎるほどいた。ビッグサンダーマウンテンに乗るために列の末尾についたがよいが、一時間過ぎてはまだ乗れないことはい加減うんざりした私は、少しいらいらし始めていた。



眠れる森の美女のお城。右手奥に舞台があり、そこでキャラクターのショーをやっていた。

「おかしい…」

「何が？」

「だって、こんなに人がいっぱいはいっているのに、儲かってないなんておかしいよ、何かの間違いだ」

「あら、だって、ここは一〇月にもなれば、夕方はすぐに暗くなるし、寒くなるしで、とても外で遊ぼうという気はおきないわ。デイズニールランドに入るのは夏場だけよ」

「いや、儲からないのは、マネジメントの問題だ。人の使い方が悪いからだ」と、こんなに待たされているのになぜかやけに落ちついている家内に少し声を荒げて言い返してみたものの、しかし、まてよ、デイズニールランドといえども馬鹿にできない、

パリと東京とを比較してまじめに考察すると、結構おもしろいのではないかと。

(1) コピー文化

東京のデイズニールランド(以下、TDLと略)が「うちは儲かっている」とえはつたところで、所詮はアメリカの自家のコピーである。コピーである限り、オリジナルを越えられない宿命にあるのだから、その点は謙虚に認めよう。とはいえ、コピーであることは、EDLとて変わりはないのだから、コピーであることをひやみに卑下することはしない。少し高級に、「文化の受容の問題」として一般化すると、日本とヨーロッパ(特に、フランス)は、アメリカの本家にあるオリジナルを手本にして、それぞれローカル文化に根付かせようとしたのだから、東京とパリのデイズニールランドの間に現にある相違点は、いわば日本とフランスの文化・経済・社会の違いを映し出す鏡にほかならない。以下、思いつく限りで、その相違点を挙げていこう。

(2) 地政学上のパリの位置

ヨーロッパのどこにデイズニールランドを設置するか。人口密集地から離れた田園につくるわけにはいかないから、どこか大都市近郊がよい。デイズニールランドはアメリカがオリジナルであるから、同じ文化的背景を持ち、かつての宗主国であったイギリスのロンドン近郊が候補地としてはまず挙げられたはずである。しかし、ヨーロッパ各国にデイズニールランドをひとつずつ設置するならば、ヨーロッパでひとつだけとなると、ヨーロッパ各地から集客するためにできるだけ中心に近いところに置きたい。ロンドンはヨーロッパの中では(辺境といってしまうと少し意味が違っても)れないが、少なくとも)はずれである。有力候補地として最後まで残ったといわれるスペインのバルセロナも、はずれである。ベルリンも、もし東ヨーロッパの経済的水準と個人所得が西ヨーロッパと同水準であれば中心であっただろうが、いまのところ、やはりはずれである(ベルリンは将来的には、非常にシリアスな中心の候補である。いや、五〇年、一〇〇年という長さでみれば、間違いなくヨーロッパの中心になるだろう)。北イタリアも、はずれである。

ヨーロッパ経済発展の地域帯は、ベルギー・オランダから北イタリアにかけてのライン河沿いにあり、パリはその線の真上にはなくとも、南北のフランスと人口密集度からして、その線にいちばん近い大都市である。従って、パリの近郊というのは、今の時点から考えても、妥当な選択であったように思える。

(3) フランスの国際的政治力

国際政治とか、外交は、フランス人の最も得意とする活動分野である(そして、日本人の最も不得意とする活動分野である。歯がゆいなあ)。人前に出て目立つスタンダードプレーをするのが好きで好きでたまらない人たちだから、「外交」という場面になると、フランス人たちはそれこそ目を爛々と輝かせていきいきと活躍する(逆に、製造業で出会うフランス人は、どことなく情気がない、元気がない。「これは自分の本分ではない」という想いを捨てきれないのだろう。そこへいくと、外交ではあんなに風采が上がらない日本人でも、製造業の現場で出会うと自信に満ちていて、立派だ)。国際機関の要職は、ほとんどフランス人で占められているのではないか(国際公務員

でフランス人でないのは、ユダヤ系か、そうでなければ、さほど有能ではない人たちである:これは冗談です)。EDLをフランスに誘致するに当たっては、もちろんフランスの政治力がものをいいたはずである。

(4) 交通政策

浦安のTDLも、そこにたどり着くにはそれほど不便ではない。だが、EDLは、パリ市内から郊外高速鉄道でわずか三〇分ほどのところにあり、しかも駅を降りるとほとんど真ん前にゲートがあるから、交通の至便性ではパリの方がはるかに上である。行政当局がグランドデザインを作成し、交通網の整備がそのパリの都市計画の一環として実施されているためである。あらかじめ大きなシステムを策定して、その後で細部に進むというやり方はフランス人の得意とする演繹的な方法である。インフラストラクチャーの整備はそれが良い方向に表れたものである。日本人は、大きな企画を策定し

た後に、細部に進むというかかるとか取れない。日本人のやり方は帰納法的であるといえれば聞こえはよいが、現実には、行き当たりばつたりのことが多い。原則を徹底的に議論することを好まないからである。

(5) 国際性

夏休み前にEDLで何か施設の事故で、確か八人のけが出た。その時、非常に興味深く感じたのは、その八人のけが人の内、フランス人はたったのひとりだけで、残りの七人は外国人観光客だったことである。つまり、EDLのお客さんは、その圧倒的多数が外国人であり、フランス人は全く少数派なのである。一説によると、全



後方にビッグサスターマウンテンの線路が見える。1時間以上も並んでようやく乗って、降りたところ。ああ恐かった。



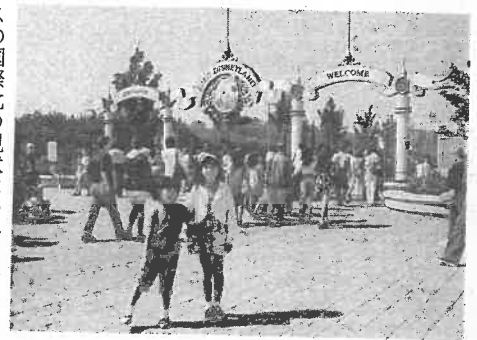
ユーロディズニーランドの正面入口切符売場が中央奥にあるのだが、人の列ができていない。やはり、東京ディズニーランドに比べて人の数は少ないというべきか。

EDLには子供(特に、TDLならごまんといる中高校生)が割合に少なかったから、フランス社会における子供の位置と子供への「投資」について考察できるし、また、比較的におじさん・おばさんのカップルが多かったことからフランス人(といっても、彼らは少数派だった)の大人の余暇の過ごし方を議論することもできるし、当然、TDLとEDLの人事管理など、まだまだ多岐にわたって論じることができるが、もう紙幅が尽きた。

たんなるテーマパークではあるが、それをきっかけに日仏の総合的な比較研究という尽きせぬ興味が湧いてくる。「パリ・東京ディズニーランドの比較研究」、誰か



入場者に占めるフランス人の割合は三〇%であるというから、このけが人の割合よりは多いことになるが、しかし、圧倒的大多数が外国人であり、フランス人が少ないことに変わりはない。私自身も、ビッグサンダーマウンテンだけでなく、園内鉄道とかスター・ツアーなどそれぞれ三〇分以上も並ばされてげんりしながら観察したところによると、そこにいた人々はやはりほとんどがフランス人ではなく、イギリス、スペイン、イタリア、ドイツなどの近隣諸国をはじめ、少し私には意外だったのは、その言葉と粗末な身なり(失礼!)からわかっていたのだが、旧社会主義圏からの客がかなり目立ったことである。いやあ、彼ら旧社会主義圏の人々にとって、ディズニーランドは文明開化の象徴、自由と解放の実感の場なのかもしれないと、密かに感激したことであった(しかし、入場料をはじめ、旅費・宿泊費はどうやって工面したのだろうか。さぞかし難儀したにちがいない)。TDLにも、韓国、台湾をはじめ、東南アジアのお客さんたちが大勢来ていると思うが、まさか全入場者の七〇%が外国人ということはないはずである。日本も以前に比べてはるかに国際化したと思うが、フラン



ユーロディズニーランドのエントランス・ゲート。郊外高速鉄道の駅を降りるとすぐ目の前にある。便利だ。一桁も二桁も違うのである。

(6) ローカルのリピーター  
EDLが儲かっている原因のひとつは、フランス人の客が少ないことにある。特に、いわゆるリピーターがほとんどないという点である(というよりは、TDLにはリピーターが多いことになる。よく飽きずに繰り返し行くなあ、あんなものどことが面白いのかなあ)。その遊園地がある国のローカルの人々があまり入場しないので

あるから、どうしても経営的に苦しくなるのはやむをえない。フランス人がEDLに行かない基底的理由は、よくいえば自国文化に対する誇り、悪くいえば外国文化(特に、アメリカなど)のように覇権国家の文化)に対する反発(敵意、とはいわないが)から、自分たちの伝統的な遊び方とは異なる余暇の過ごし方に無関心なためである。もともとフランス人たちは自分の暇の過ごし方を確立していたのだから、なにもアメリカ人から教えてもらう必要はないのである。

(7) 所得  
EDLが儲かっている原因は、入場者数が予想よりも少なかったことのほかに、負債額が高んだ上に、ヨーロッパの高金利で利子負担が重くのしかかったこと、そして、とりわけ、ひとり当たりの消費額が予想を下回ったことなどが挙げられている。EDLは開設当時、アメリカや特に日本のTDLの事例からひとり当たりの消費額を入場料込みで七〇〇フランと見込んでいた。これは甘い見通しだったといわざるをえない。「フランは現行レート(九三年一〇月末)では一三〇〇〇円程度にすぎな

い。大した額ではない」と考えてはいけな。かりに四大家族で遊びに行つてひとり平均七〇〇フランを消費すると二八〇〇フランになつてしまふ。フランスの労働者の平均月収は、約八〇〇〇フランであるから(この社会層では、共稼ぎが多いから家計の月収はこれよりも多くなる)、これはその月収のほぼ三分の一に該当する大変な金額なのである(フランスにはボーナスはない。年収は月収の一二倍ほつきり)。労働者の家庭は本来はこの種の遊びに興味を示すはずだと思ふが、なによりも社会の大多

数を占める人々が大半して入場しないというのは、EDLには大きな痛手であろう。しかし、この所得ではおおいそれはテーマパークに行けないし、行つても最小限度の出費で済まざるをえない。逆に、いつの間にか日本人の所得が名目的にも、そして、実質的にも大きく増加し、テーマパークでの遊興費などという不要不急の用途にも大きな出費をすることが可能となつていたのである。

卒論で研究テーマにしませんか。そんなことを考えていたら楽しく遊べなくなる? 研究テーマとしては邪道だ? ... かもしれない。まあ、娘たちも「ユーロディズニーランドに遊びに行けるのなら、もう一度パリに行つてあげてもよい」と言っているし、どうせ付き合ひでまた行かなきゃならないなら、じゃ、仕方がない、私がやるとするか。